確かに、私は牢獄の中では、読み易い本を願っていた。そして、その中心は裁判パホーマンスもさることながら、九州派の方の比重が、とかく強かった。人生のツマヅキ、人生のヨロコピ、人生のモロモロをなんらかの形で歌わずにはいられなかった。そして、いくらも期間がたっていないのに、現在の私は、すべての時間、形を拒否しようとしているかのように思える。いや拒否すらもが面倒臭いのである。その面倒臭ければ本も作らないでよい筈のものである。だが、そのエネルギーは、その面倒臭さで消え去るものではない。結局、その二頭の終りと始めの意味が解けぬまま、物事は並行して進められている。これは一体何を意味するものであろうか。いま、私は、人間の出発と終エンを同時に問おうとしている。その問いの形式も、実態も、時間も、すべてのものを忘れ、ただひたすらニつの頭の出現にすべてを、すべての意味をひろうということの意味、無内容の風景が延々とつづく、無意味にページが重ね合せられてゆくエネルギーの無気味さへと興味はつづくのである。この憧景にも似た気持は何処からくるものであろうか。この得体の判らぬ怪物につきあう「とうかしょぽう」の東先生はなにがなんでなんなのか理解されぬまま闇夜を突っ走る苦しみに悲鳴を上げているのに違いない。この膨大な本は、膨大な紙も必要とする。紙は、また金を出して購入しなければならないのである。この無意味に近い作業に何故、かくも私は狂うのであろうか。その製作に要する費用も懸命に作りつつある。その実態こそは、いったいなにであろうかと自問すれどもその答えはない。あえて説明すれば初めもない終りもない、或る種のエネルギーの波打ちがこうも私を狂わすのであろうか。確かに、ここ数年、二つの頭で表現される回帰への拒否であり、初めへの否定であり、当然終りへの反逆である。ただ、すべて、すべてが混沌なのである。それも千の眼が射る白昼の理性の、論理の季節の狂乱の果実なのである。かかる文章をもって、本質からますます遠くなってゆく。本質から遠ざかろうとするもの、それは、いったい何物であるのか。それにしても本質から遠く離れてしまったものを拾ってゆくと、まだ片隈には僅かながらも、かすかに残っている物々たちの意味ありげの歴史への残存を。